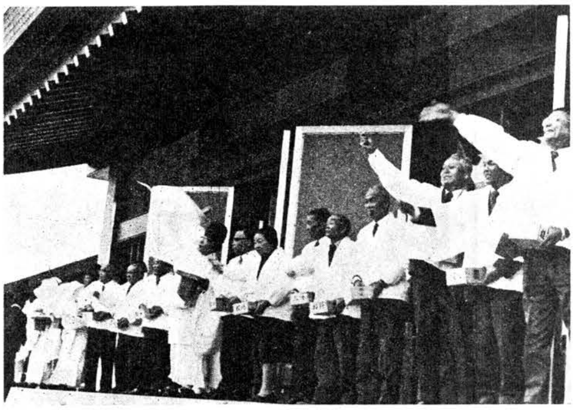
宗像

毎日十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
福岡県宗像郡玄海町
電話 09406 ② 1311 代
定価一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店 福岡市博多区東公園二一ー三一（〒八一二）電話福岡（〇九二）六五一ー九四五六番
本社 京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）電話京都（〇七五）三四一ー三四一（代）～四番 三五一ー一三三四・六〇六六番

清新の気満ちわたる中 節分祭盛大に斎行



寒気厳しい二月三日、今年の災厄を祓いやる節分祭が祈願殿で斎行された。

この日、多数の崇敬者及び郡内官公庁の代表者の他に、玄海町幼稚園児・東海大学附属自由ケ丘幼稚園児等の良い子等二百数十名が先生に連れられて参列、祭典は厳粛な中にも賑やかな雰囲気で執り行なわれた。

祓いに引続き葦津宮司の祝詞奏上関係者の玉串奉奠の後、一同祈願殿正面広場に整列、祈願殿石階上で恒例の鳴弦の儀が古式床しく行われた。

これは邪悪を祓除る行事として我国で古くから行われており、当社でも神職二名が葦矢・桃弓をたずさえ石階端に進み、一名は東北一名は西南の方向に向って天空、地上を三度射て儀式を終了した。

続いて神職以下崇敬者の中から選ばれた年男等多数が福豆の入った一升桝を持ち、古式に習て「福は内、福は内、鬼は外」と唱えつつ福豆を撒いて豆打ちの儀を終了した。

祈願殿前に参列した多数の参拝者にはビニール袋に入った福豆がそれぞれ手渡され皆うれしそうであった。

祭典終了後斎館に於て直会が行われ、葦津宮司の講話があり、和やかな内に散会した。

一方、清明殿に於ては郡交通安全協会、宗像警察署の協力のもとに幼稚園児に対する交通安全教室が開かれ、福岡県警の交通巡視員のお姉さん等が、巧みな腹話術や人形劇で交通指導を行い、園児達と付添いのお母さん方は熱心に聴き入っていた。

「節分」とは立春の前日をいい冬から春に移る季節の変り目に邪悪を祓って清々しい心で諸事に処するため古くから追儺の行事が行われてきたのである。

当社でもこの日を中心に厄除大祈願祭を受付けており、今年も多数の厄除招福の祈願が執行われた。

◇写　真◇

上は、年男による「豆打ちの儀」

下は、鳴弦の儀の模様

宗像郡舞踊協会 初舞いの会盛大に行わる

―中央公民館大ホールで―

宗像郡在住の舞踊家で結成されている宗像郡舞踊協会主催恒例の新春舞初めの発表会「初舞の会」が去る二月十三日、宗像町中央公民館大ホールで賑やかに開催された。

今年で三回目を迎える郡内の師匠さん達の会は年毎に盛大となり曲目も常磐津、清元、長唄、地唄民謡等とバラエティに富み、かつら、衣裳付の本格的な舞台で二十六番を上演、会場は満員の盛況で終日観客を魅了した。

論説 宗教者の営利観

―結婚式神道と葬式仏教―

宗教全般が、唯物史観に、人間を迷妄に陥れる阿片ときめつけられる理由は、信仰上の精気を失った儀礼慣習の指摘にある。現代の宗教者が堂々と唯物史観の理論に立向って、宗教は阿片にあらずの自信に勝ち得る方途は甚だ難しい。それは営利観に人間としての通俗生活を托している宗教者が、各種宗教の殿堂に満ちているからである。

わが国では、比較的歴史の浅い基督教は別として、神社仏閣を擁してきた神道と仏教は、共に多数の殿堂や文化財を持っている。これが今日の学界に有力な資料として、貴重な意義に守られているのは誠にありがたいが、一面それらが管理者たる宗教法人或いは独占奉仕者の生活手段に利用されていることも、見逃せない事実である。本尊も拝観料を払わねば拝めない。殿堂も入場券を買わねば通れない。この傾向は歴史が古く、有名な高徳の宗教者が出た宗門や霊場ほど盛んである。

皮肉屋のジャーナリズムは、観光株式会社と称し観光僧と呼ぶ。金になれば女人禁制の修道戒律も解除、僧房は俗人の宿泊旅館、本堂の内部は濃染の僧衣を纏った従業員の土産販売所では、文句を言える道理もない。

宗教者の営利観は決して抗議を起さない。拝観料入場料はじめ鐘の撞き賃、仏具や名産の販売手数料でたっぷり稼ぎ、高級外車を走らせたり女房に外国旅行させたりの豪奢な生活では、その妨害以外のことでは争わない。道統も面目も構っておられないのが本音であってみれば当然と肯づける。

観光資源に恵まれない宗教者たちは何で営利観を立てているか。神道者には、春秋の黄道吉日に神前結婚式がある。大安を決めた易法は、適当に日数をおいている。ホテル料亭は式場を設備、狙いは披露宴でも挙式が先ず手順であってみれば、神主を雇って何組も扱う。神主は中華料理店まで含めて式料の配分稼ぎに大安多忙

白衣装束を小型トランクに納めて、数ケ所かけもちは雇主から受けた貴重な株である。手不足の時は、臨時に知合いの神主に一部を受け持たせて株主はピンをはねる。大安の日に奉仕神社の祭があれば、その執行を他人に委せるのも営利観から出る不都合である。

序ながら、これらの式場の神前供物は、なまの魚菜でなく、年中使える瀬戸物が三宝に戴っているとか。それをなま物にしてくれと注文をつけた神道者は解雇されたと聞いては笑えない。

元来、わが神道に神前結婚はなかったが、明治年代に大正天皇が宮中の神殿で挙式されて、漸次一般が倣うようになり今日の隆盛を見るに至ったのである。昔は神道者自身の結婚式でも、社務所か居宅で行い、尊貴な天神地祇を祀る神前を避けた。一家の私事を遠慮する気持に違いない。

この筆法は仏教者の場合にはあり得ない。宗教的本質を異にする仏教で、仏前の葬式は当然である。自宗の死者を仏前で葬式を執り行うことは、弥陀の本願に適った常道である。

然し、営利観に基づく葬式仏教はいただけないが、近代産業が誘う農漁村人口の激減によって起る寺門経営の難渋を知らねばならない。特に住民の数に比べて寺の数が多い地方では、過疎化が相対的に寺の経済を圧迫する。

門徒の多い或る雪国の例を拾ってみる。ひどい貧乏寺では、住職が村当局から生活扶助を受けてやっとお布施ゼロの苦境を凌いでいる。檀家が減る一方の地方では葬式仏教の非難どころではない。

「寺が雪に埋もれると村民の門徒は雪掘り、修理が必要になると苦しい寄付集め。これは必ずしも精神的結びつきによる奉仕でなくて、寺がつぶれると葬式に困る。村議会が住職の生活扶助は不当と問題にしても、お布施の収入がなければ食ってゆけない」と。

法話を聞く集いも催し難いとなると、また葬式仏教も成り立たないとなると、とても信仰に重点をおく宗教論には縁遠い話である。社会構造の大きな変化、殊に近代生活の宗教軽視の風潮の中にあって、如何に唯物史観が阿片論に攻勢をかけてきても、宗教者は当面の生きる問題が先決であろう。

観光株式会社の従業員と心得る宗教者の営利観、有能な後継者の背反、物質と健康だけを頼む世情の中に、宗教はどう生きてゆくか。神仏の裁定は聴き難い。

御礼

年末年始に皆様から御郵送いただきました真心からなる初穂料は五十二年新年大祭に神前にお供えして皆様方の健康と弥栄を祈願致しました。

ここに新年の祭儀を盛大に滞りなく御奉仕出来ました事を深く感謝申し上げます。

宗像大神全国総本宮
宗像大社社務本局

特別崇敬者各位

阿蒙少言

「この矛はどんな盾でも通す」と宣伝する商人が「この盾はどんな矛でも防げる」と効能がき。これが矛盾の語句を生んだと、中国の故事が辞典に見える。老荘孔孟以来、さすがは文字の国で故事によって作られた熟語は豊富で、その多くがわが国で学ばれてきたが、今日使用の少いものや廃れたものの中、矛盾の語句は健在である●今の世情に矛盾が横行するから、それが記事に会話に頻繁に登場するわけ。虚偽、粉飾、無恥は社会現象の矛盾撞着に源があり、人間性を麻痺させ低下させる悪気流で、残念ながら公害の騒ぎに数えられない●表現の方法が、世間の注目を引くことから騙すことへ飛躍する。土地建物の販売から、日用品の広告まで、高級・特製・優秀などの形容詞に飾られる。分譲の住宅地に駅から十分とあれば、一時間はかかる。純粋蜂蜜が殆んど水飴、優遇の貼紙に勤めると冷遇。安心して住めぬ社会は、争議訴訟離婚の急速な上昇率を統計に示す●一等をやめてグリーンなど民主化平等化の餘計な心遣いだろう。料金さえ払えば誰でも乗れる車なら、一等二等でよい。粉飾が過ぎて、特級酒の上に超特級が出来ると、価格の吊上げ方法だと笑って済ませぬ事情も発生する●特の字を嫌い、むしろ極度に憎んで死んだ老婆があった。粒々辛苦、女手一つで愛児を大学までやったが、不運にも時は大戦末期で愛児は特攻隊に消えた。敗戦後の希望なき餘生は、掌中の珠玉を奪われた絶望感も深刻で、特の字を憎む気持は特攻の名の冷酷さを怨む母性愛から出ていよう●「昨日は快晴、今日は雨、人生の浮沈亦斯くの如し」と書いた紙片を届けて、都合よく訂正して掛軸に頼むとの注文。直す所はない。自ら悟得した人生観が最もよい。特の字を憎む人生観は浮沈の外。（白雲）

第一八七回 宗像大社歌会詠草

毎月一日〆切　詠草到着順

福岡　江崎　琴子
凍てつきし雪眠らしつつ太陽は静かに沈む西に染みて

田熊　鷲津かつ代
抱かれんと這ひ寄る孫のごこえたるもろ手をわれの掌に握りしむ

武丸　原田マツ代
歩行機にすがりて食事も椅子にかけ老骨折の癒え難きかな

八幡西　安川　浄生
彦根城の日課となりし晩鐘が広がりもちて湖に消へゆく

戸畑　田中ハツセ
元旦に二人の子等と手術する夫の顔色上気して見ゆ

宗像　中村　幸
掌に取りたき程の石ほとけ草生に風化のときまつすがた

津屋崎　西住きさぶろ
おだやかな海大寒の日を沈づめ朝霜や昼あたたかき陽がたのし

武丸　原田　リノ
いよいよ腰は曲りぬ神棚のいくつもの餅を孫におろさす

原町　八波　五月
ささやかな思いなれども大方は成し得て遠き除夜の鐘きく

福間　広渡一寸毛
我が命長からんこと祈りつつ好きな酒止め好かぬ物喰い

東郷　田中　春子
しんしんと霜冷えのするこの朝木槌の響き近き距離感

香椎　桜井　つね
種種に予定しるして過ぎし日日よカレンダーを歳暮の壁より外す

田久　小方　実
若布拾う荒磯の娘らに手を振りて烏賊釣り船は通りすぎ行く

鐘崎　村田　四郎
春陽背に浜の媼はわかめ干すつやもつ顔に老ふかげもなし

田久　立花　勇雄
額つきて元旦祭の祝詞きく背を吹く風に粉雪の舞う

田熊　吉田　直志
篝目の流れさやけき神苑に柏手ひびく新春の朝

名古屋　野崎　傳三
接心のみ言葉を聞く堂ぬちに冷え迫り来ぬ雪のあかつき

田島　吉武　武雄
屠蘇の香のまださめやらぬ初場所に闘志満々若三杉関

津屋崎　麦野　時雄
ゆかり深き県立水産高校後援会顧問の役を九十一才迄も

武丸　立石　昇
年賀状出さざりしをいぶかしみつつがなきやと教へ子電話す

曲　天野トモエ
曼珠沙華枯草に青む千間堤今歩く人なき長きこの道

津屋崎　占部　由久
菊枯れて園は淋しくなりぬれどシクラメンの花今盛りにて

池田　永富　臻
駅ちかき田舎のまちの旧き家に歌詠む老女を訪ねて行きぬ

宮田　北原　君子
意に反し少量とれし秋小豆明日の恵比須に赤飯作らん

東郷　藤崎　辰子
放生会おはりて水の落されし釣川に蜆とりたり母と

徳重　石松や寿子
別れ来し友の年賀に此の四月母になるとう添書のあり

津屋崎　浜　津鴻浪
ほろ苦き冷めた紅茶の一さじに生涯消えぬ悔を思えり

田熊　力丸　一郎
幟たて掃き清めたる氏神の元朝の拍手森に冴ず

大井　吉田ますみ
ほつほつと白き山茶花咲き始むゆきし母の忌も近まりて

深田　中野　節子
放生会の露店のさまも尋ねきぬ帰省かなはぬ子の遠き声

吉留　白木うめの
やわらかき風が袷の裾を吹く友を待ちあはせ佇てる舗道に

田熊　今村　重刀
教え子の老いてかわらぬやさしさに若かりし日の思ひ出うかぶ

小金井　宮島　佐紀
人形を朝早々とかかえ来てパパのみやげに不満らしとなりの子

宮田　片山　朔子
慾しと云う赤と黄色のチューリップ飾りて祝う裕紀子五歳に

宮田　片山　一
浜松の落葉集めて背貧ひたる媼は渚の近路を歩む

―羽ばたけ若者よ―
成人祭斎行

人生の新らしい門出にふさわしい好天にめぐまれた一月十五日午前九時三十分より、宗像大社祈願殿に於いて地元玄海町新成人者（百九十名）、町長、町議、町内各界代表、氏子関係者など多数参列のもとに成人祭が厳そかに斎行された。

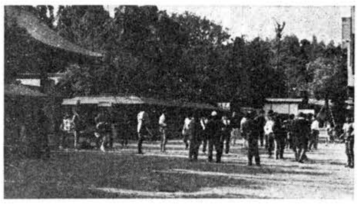
親しい友、なつかしい友と語らいながら集つまった若者達は、多くの参列者に祝福され、新らたなる決意と、喜こびとを胸に秘め玉串を捧げ祭典は終了した。

引き続き本殿に参拝、宝物館前にて恒例の記念植樹（桜）を終え、清明殿での成人式典に移った。

清明殿での成人式では、多くの来賓、成人者代表の祝辞・謝辞のあと、「若き世代における第十二章」と題して、宗像町教育委員安部一三氏の講演があり閉会した。

午后からは、恒例の成人祭祝賀町内対抗駅伝が催され、華やかに装った和服姿の娘さんたちの声援をバックに各選手は白熱戦を展開した。終日社頭は成人になった若者達の交歓風景で賑わった。

清明殿での成人者代表の誓いのことばを誌上に収録致します。



（上）記念植樹の成人者代表

（下）出走前のトレーニング

◇成人を迎えて◇

私たちは、今日という日を、前には玄界灘をのぞみ後には雄大な湯川山をひかえのどかな田園風景に囲まれたこの玄海町でむかえることができましたことを幸わせに感じています。

また他郷にて成人式をむかえた友人達も、故郷であるこの玄海町のことを想いだしていることと思います。

本日ここに成人式をあげられ、私どもの成人へのかどでをお祝いくださいましたことはまことに感謝にたえないところであります。

私どもは、先ほどからの町長さんはじめ来賓の方々のありがたい、意義深い数々のご訓示をしっかりと胸にきざみ今日ただいまから精神的には、自己の人格完成に努力すると共に、社会的には、国家社会の繁栄と進歩発展に協力する真の民主的な日本人となるように心がけ、一人前の人間としての責任と自覚とをもつ人間として、最善の努力をつくすことを成人一同の代表として誓います。

今日のこの成人式を宗像大社でむかえることができましたことをうれしく思いますと共に色々お世話をしていただきました皆様、本日私どものためにご参加いただきました来賓の皆様に深くお礼を申し上げまして誓いの言葉といたします。

昭和五十二年一月十五日
玄海町成人代表　安部武彦

〈成人の日駅伝大会〉
田野Aチーム　優　勝

成人祭奉祝町内一周駅伝大会も二十二回目を数える。本年は昨年より二チーム多い十三チームが参加した。好天にも恵まれ、高橋町長のスタートの合図で正午に福田バス停前を出発九区間で熱戦をくりひろげた。

レースは昨年に続き一区では、田野Aチームが先行、昨年優勝の田島・多礼チームはすべり出しが不調であったが5区で先頭に立った。各チームの選手共日頃の練習の成果をよく発揮し、自己最高のペースでおおいに、健闘し、トップが交互に入れかわる、はげしいレース展開で終始したが、最終の九区でついに田野Aチームがトップを奪い返して宗像大社本殿前の決勝のテープを切った。

沿道の各所では、多数の町民がわが部落の栄誉をかけて力走する選手等に拍手をおくり、各チームとも一名の落伍者もなく大会を終了。成人式に花を添えた。

成績は次のとおり

第二十二回町内一周駅伝大会総合順位

優勝　田野Aチーム（一・三二・二八）
準優勝　田島・多礼チーム（一・三三・五六）
三位　段天・湊チーム（一・三七・〇〇）

社務日誌抄

一月十日　綺根元責任役員参拝
一月十一日　正月祭警備反省会
一月十三日　献米奉告祭
総代永年勤続者感謝状贈呈式
一月十五日　成人祭、午前九時、於祈願殿
第二十二回町内一周駅伝大会開催
一月十七日　文化財防災打合わせ会
宗像消防本部、玄海町消防団
宗像警察署出席
神社庁宗像支部新年会
邪馬台国シンポジューム関係者八十名参拝
一月十九日　玄海町成人学級（短歌）
一月二十二日　宇美八幡宮宮司他四十五名参拝
宗像大社互選会、於斎館
一月二十三日　第二十回宗像マラソン大会開催
菊花会役員会開催
一月二十五日　成人学級、於斎館
一月二十六日　文化財防火デー、防火訓練、防災施設総点検す
一月二十七日　横浜出光会会長他参拝
成人学級（菊）
一月二十八日　葦津宮司九州地区別表神社宮司会出席
神青会国旗掲揚促進運動パレード参加
二月一日　職員会議
桜苗木二百本奉納、安永弥三氏（鞍手郡若宮町）
二月二日　大漁祈願祭
献上若布打合わせ会
昭和五十二年度海洋神事打合わせ会
二月三日　節分祭、午前十時、於祈願殿
交通安全教室開催
二月六日　初午祭、於津加計志神社境内稲荷社

×　×

ご主人と宿六

潮干狩、紅葉狩さては[illegible]狩まで狩と名のつく獲物行事も、四季を通じてあわたゞしい今日の生活でも行われているが、コンクリートの壁の中に暮らすアパート族にとっては休祭日に郊外に出かけたいのは肯ける。レジャーを楽しむというよりも、レジャーが呼び出す不満解消でもあろう。

物価は上がる、収入は追いつかぬ、それでは狩と名のつく弁当持参の遊びも、いさゝか心にブレーキがかゝるが、近所の手前もあり安月給かくしの見栄もあって、籠城はまかりならぬ。

源頼朝がやったらしい富士の裾野の巻狩から、江戸大名の鷹狩まで、特権階級の贅沢な狩遊びも、現代に至って貝拾いピクニックで、庶民的に性格を変えてきた。ももしきの大宮人でなくても、暇と金さえあれば、誰でも気軽るに桜かざして狩遊びできるご時世、現代人はありがたい世情になったと喜んでもいない。昔なら巻狩鷹狩など平民どもにはとんでもないこと。たゞし、狩は借りを誘う場合もあり馬鹿にならない。

潮干狩などと結構な名は無用、住居が海浜に近い三楽君は、好物のあさり貝を取りにミルクの空缶さげてよく出かける。気の向くまゝに、骨折らぬ程度に、砂浜に親しむ。

近所の婆さんが「魚釣りのエサ掘りですか」と声をかけると「動物のエサ探し」と答える三楽君。自身食べるのを、何か他の飼いものに与えるエサに聞える返事をする。人間だって動物だ、と無言で笑っている。

声をかけた姿には、二十年あまり前に、彼がPTA会長をしていた頃の想い出がある。決して地域社会のボスを気取ってもいない彼が、多勢に無勢の説得に負けてPTA会長を引き受け、さんざんな目に合った。

新興住宅地に人口の急増はまことに急ピッチ、当然生徒数の増加が校舎不足の結果を起しつゝあった。こんな難局に、会の予算も貧弱で会合費や交通費を会長が自腹を切って話を進めるでは、会長になる馬鹿はない、三楽君はその馬鹿になった。いや、馬鹿になされたのである。

大きな課題は、このまゝでは二部授業が避けられないとあって、校舎増築促進である。PTAの総会や役員会も頻繁で、本職の支障も少くないが、ママ連中のつるし上げを食っては大変と、彼は東奔西走した。

市役所にお百度、役人は予算がないとか、新築用地の造成は一年延期とか。市民の税金の中から給料貰って、毎日沈香も焚かず屁もこかず、規則や前例を盾にとって月並みの挨拶で平気な役人どもに、あきれ果てて自分の伜たちが成長後、決して役人にはしないと痛感したのもその頃であった。

ブルトーザを使って山を削り校地を広げるには、随分と費用がかゝり、夜分の会合にビールやサイダーを自弁するのがやっとの貧弱な会長には、手の届かぬ話である。苦心の一策は意外な成果を生んだ。瓢箪から駒が飛び出して、駐屯米軍の工作隊が出動した。僅かの日数で校舎敷地は完成した。

彼は敷地完成の日、他の役員と現場を視察して、米軍将校を拝みたい程嬉しかった。奥さまマダムども、女房と種々雑多のPTAママさんども、勝手なうるさい攻撃を受けずに、校舎新築の目算が立って安堵した。

その頃、例のエサ問答の婆が、PTA会合で最も勇敢に恰も会長を問責するかのようにまくしたてた。その姓名を知らなかったので、後日の役員会で「あの幅の広い奥さん」と表現した一言が、いつか当人の耳に入り、ある席で幅広い表現に抗議が出た。今でもうるさい鼻息の荒い姿であろう。

いっそ太った女と遠慮せず表現した方がよかったか知れない。日本語は難しい。特に敬語となると、その面倒さは世界一と折紙がつく。言語豊富と敬語の一角だけでも、自慢してみるか。

あなた、君、貴様、お前などの相手の表現、殿や閣下、上様などもすたれたが、ご内室、ご令閨は手紙にも使わなくなった。他人をご主人様は当然だが、いくら自分の夫を謙遜する気持からと言っても「うちの宿六」はどうかと思うが生きている。愚妻豚児などは、敬語の国では最も馬鹿げた表現で、これを使えば賢妻に殴られる。

残筆しがらみ草紙(2)
玄陽隠士

こうの神湊(みなと)　(65)

楠早鳥作
福田長庵画

幕府（その五）

その日の夕刻、斯波義継邸の門前には人々が群がっていた。大内の家人がそれをかき分けて道をつくり、明継が馬をおり、碧眼の女人が輿からおりると群衆が歓声をあげた。

今日の招宴を何故洩らしたのかと明継は考えを廻らし、幕府の陰険な策謀に気がついた時は遅かった。門を通って中に入っても当然あるべき迎えもなかった。西国の雄、大内家の使者を閣僚の私邸に召喚し、これを冷遇することにより幕府の権力を庶民に誇示する。〈子供じみたやり方だが庶民うけはするだろう〉明継は心中苦笑した。

非礼をなじるような目差しの家人たちを制して案内を乞うと義継の近習が現れた。家人を溜りに止どめて、明継は女人を伴いその後に従った。部屋に通され下座に坐った。ほどなく義継が部屋に入り上座に坐った。座をあらためて挨拶をしようとする明継を制して〈へ実はもう一人の客がある〉と伝えた。背后に人の気配がして思わず振りかえると、中肉中背の僧が一人、切れ長の目の表情をくずさず蔚然とした態度で立っていた。〈紹介しよう、これへ〉義継は斜め横の席を指した。僧は号を絶海と称し名を中津と呼び、夢窓疎石に師事し、詞藻絶妙といわれ、五山第一の秀才の誉が高かった。数年前明国より帰朝し義満政権の相談役として枢要な位置を占めていた。後年、大内義弘の運命を決定ずけたこの人物が、大内家と関わりあいを持つ最初の出会いであった。

義継の紹介で初対面の挨拶が交わされ、西国の政情についてとりとめのない雑談が続いたが、時折りみせる絶海の鋭い質問から明継は、この対話が後日、幕府の有力な西国政策の基礎になることを感じとった。彼等が何よりも関心をもったのは九州における今川了俊の勢力であった。ここから明継は了俊の九州探題解任の間近いことをしった。やがて酒肴が出て碧眼の女人が酌をした。この夜の宴席で将軍足利義満の厳島参詣が明年三月に行われることが告げられ、更に四国、中国、九州方面にまで足をのばす予定であるので万事につけて遺漏がないようにと幕府の内意が示された。宴の果てた頃、女人を将軍の側女として差出すよう命じたが〈折角では御座いますが京見物を頼まれました他家の預り者ゆえ御辞退申し上げます〉と素気ない返事がかえって来た。女人に対する恋慕の情がそうさせたのか、それとも女人の口から大内の対外貿易の実態が洩れるのを気づかってことわったのか明継自身自分の心を測りかねた。明継一行が帰った后、一刻あまり義継と絶海は対座した。〈にべなく辞わられましたな〉邪揄するように語りかける絶海に〈ああ正面きって物を言われると僕としたことが言葉に窮してな、田舎者は礼儀をわきまえぬ〉渋面をつくって吐き捨てるように義継は言った。〈さて彼奴が田舎者かどうか、愚僧かって明国の趙越なる僧と会いました折大内家に寄食いたす筑前宗像の家臣井上某なる者、もとは彼地の偉人張士誠の遺児であると伝えていました〉つぶやくように絶海が言った時、前裁に人の気配がした義継が目を光らせ〈阿斎か〉と声をかけた。秋草のかげから阿斎が姿を現し〈ちと解しかねる事ができまして〉と前置きをして語り初めた。〈大内領内に潜ませている手の者からの報せによりますと、この所大内館の模様が常とは異りそれに義弘、満弘、不仲の噂が乱れとんでいますが―〉〈さて、義弘は嫡子、満弘は庶子この様な噂は世間ざらにあるものを〉と言いおいて立上りかける義継を見上げて〈彼奴にしてやられましたな、弘世は死にましたぞ、たとえ兄弟不仲でも弘世が在世中ならその重みで噂も立ちますまい〉と絶海は断定的に言って口をつぐんだ。〈とすると西国政策を変更し大内家の継嗣争いに乗じて西国一の守護を滅ずか〉義継の心は微妙にゆれ動いた。時は今、熱い目を絶海にむけると、白けた顔をして首を横に振った。〈機は過ぎました。彼奴の口車に乗って吾々はあまり進み過ぎましたな、明年の厳島参詣については幕閣に表沙汰にしましたし讃岐の細川頼之殿にもその旨報せました、また対鮮交易についても相当の言質を彼奴にとられています。今になって政策変更は、いたずらに幕府の危機を招くだけです思えばこのひと月が勝負でした〉自嘲して絶海は、明継の顔を心に刻みつけた。互の智力をしぼった壮絶な戦いはこの日から始った。

話題の新車をみる
ギャラン・ラムダの巻 (三)

従来、三菱はこの車に関して概ね保守的色彩が強い体質とされてきたが、数年来よりガラリと変身してより新しいものを目指し且つ他社に先がけて実現してゆくという方向に変わって来ている。

その代表例として、新しい分野を開拓したクルマ、ギャランΛ（ラムダ）を今回紹介したい。

Λはギリシャ語のアルファベットの十一番目の文字で、英語のLに相当し、LUXURY（おしゃれ）の頭文字を表わす。それに相応しく国産車のイメージを破ってハードトップのクーペの良さを共存させたニューモデルである。むろんギャランΣ（シグマ）をベースにしており、十二月一日から全国一斉に発売開始した。

車種構成は、基本モデルのGSL、高級ムードの溢るるスーパーツーリング、スポーティなGSRの三機種でGSLとスーパーツーリングには三速フロアセレクターのオートマチック・トランスミッションが用意されている。

全長四五一〇ミリ、全幅一六七五ミリ、全高一三三〇ミリで、外型はノーズの先端を斜めに切り落としたノーズ。横縞のグリルに納まったヘッドライトは初の角型4灯式、ルーフをぐるりと取り巻くリヤ・クオーターピラー、大きくラップラウンドしたリア・ウインドウ、ボディ面とサーフェイスになったテールランプなど新鮮なイメージである。

元々、空力的な研究に於ては歴史と伝統をもつ三菱だけに、高速走行時における⑴空気抵抗の減少（スランとノーズ・ローウインドアングル・ラップアラウンドリアウインド・セミファストバック）②揚力の削減（ロングノーズ・エアダムスカート）③横力減少（タンフルホーム）に関しての研究成果）を見ることができる。

エンジンはΣ用と同じ4G52型・水冷直列4気筒OHC一九九五CC。エンジンの振動を消すサイレントシャフト付きの〃アストロン80〃である。百km／h走行時の室内騒音は六九LBGSRに搭載されているツインキャップ付きとシングルキャブとがあり、MCAシステム（エンジン改良+EGR+サーマルリアクター）による五十一年排出ガス規制に適合している。

室内は豪華で、最上級車には①6スピーカーのカセットステレオを装備、目新しいものとして国産車で始めての②一本のスポーク・ステアリングホイール③メーター類は丸型六連で中央に大型スピードメーターとタコノミメーター（回転計に組合わされたエコノミメーターで、スイッチを押すと、一時間当たりの燃料消費量を指示する）がある。④全周水平視界は三二五度、後方水平視界は五七度で死角が少ない。⑤フェンダーミラーはリモコン調節⑥足回りは前輪ストラットにIアーム方式、後輪は4リンク式でコイルばね方式⑦4輪ディスク・ブレーキの採用⑧重力と引出し時の加速度の二重感知によるユニベルト⑨衝撃吸収式ボディ⑩室外に設置した燃料タンク採用などによって、斬新なものが溢れた革命的なパーソナルカーである。

見直そう 宗像の自然と文化

（訪ねて見よう、宗像の自然と文化財…宗像青年会議所 76' JC統一デー事業記念）

町区分	文化財区分	名称	地図番号	所在地	参考	あなたのメモ
宗像	県・天	吉武の槇	1	吉留、高山勉	樹高21米イヌマキ	
〃	〃	光岡八幡宮の大樟	2	光岡、光岡八幡宮	樹高28.6米	
〃	〃	横山の大樟	3	横山	樹高26米	
〃	〃	八所宮のイチイガシ樹林	4	吉留、八所神社	イチイガシの天然林	
〃	県・彫	木造十一面観音立像	5	吉留、観音堂	平後、樟一本造	
〃	県・文	天満宮の大樟	6	吉留、平山天満宮		
福間	県・民	天正三年拾月起拾月祭座帳	7	舎利蔵	室町、勝宝寺関係資料	
〃	県・天	舎利蔵のなぎの木	8	舎利蔵字水上	樹高29米5本	
津屋崎	国・考	宮地獄古墳出土品、骨蔵器	9	宮司、宮地嶽神社	7世紀、古墳出土器、火葬骨蔵器	
〃	〃	一楽院文書並に法具類	10	在自、金毘羅神社	天蓋山修験資料	
〃	県・天	恋の浦海岸	11	京泊	化石群	
玄海	重・建	宗像神社辺津宮、本殿、拝殿	12	田島、宗像神社	宗像氏貞(1578)建立、小早川隆景(1590)建立	
〃	重・彫	木造、石造狛犬	12	〃	鎌倉、50糎	
〃	〃	木造釈迦如来立像	12	〃	鎌倉、清京寺式	
〃	重・書	宗像神社文書	12	〃	平後、論旨、教書、祈願書等8巻	
〃	重・工	藍達威肩白胴丸	12	〃	足利尊氏着用	
〃	国・考	沖津宮祭祀遺跡出土品	12	〃	沖ノ島出土品	
〃	重・考	経石	12	〃	南宋、如来像浮彫	
〃	〃	滑石製経筒	12	〃	仁平4(1154)銘、稲元出土	
〃	国・史	宗像神社境内	12	〃	沖津、中津、辺津宮の境内配置	
〃	県・工	梵鐘	12	〃	奴山縫殿神社所有永享12銘	
〃	重・書	色定法師一筆一切経	12	〃	鎌、興聖寺所有4331巻	
〃	重・彫	木造不動明王立像	13	吉田、鎮国寺	像高94.5糎	
〃	県・考	線刻釈迦如来石仏	13	〃	鎌、弘長3(1263)銘	
〃	〃	銅製経筒	13	〃	保延4(1163)銘	
〃	〃	阿弥陀如来座像板碑	13	〃	元永2(1119)銘	
〃	町・建	鎮国寺本堂	13	〃	慶安3年建立	
〃	県・彫	宗像五社本地佛	13	〃	大日、釈迦、薬師、阿弥陀如意輪観世音	
〃	県・工	梵鐘	14	田島、興福寺	室、全高94.83糎	
〃	〃	〃	15	鐘崎、泉福寺	全高1.15米	
〃	県・民	海女の用具	16	玄海町教育委員会	水めがね、いそおけ等10点	
〃	県・天	孔大寺の大銀杏	17	池田、孔大寺	樹高37米	
〃	〃	イヌマキ天然林	18	鐘崎、織幡神社	大きいもの約30本	
〃	国・史	桜京古墳	19	牟田尻	6世紀、装飾古墳	
〃	町・史	平信盛墓碑	20	池田、釣山	平安時代	
〃	町・書	承福寺文書	21	鐘崎上八、承福寺	黒田如水寄進状他	
〃	町・天	大楠	22	田島、八幡宮	樹高35米	
〃	〃	藤の木	23	江口、浄光寺	3本、枝張り18米	
〃	〃	バクチの木、銀杏の木	24	田野、依岳神社	バクチの木1本、イチョウの木1本	
〃	天・記	沖の島原始林	25	沖の島	亜熱帯植物の北限	
大島	県・建	中津宮本殿	26	大島村		

（注）国・重…国指定国宝・重要文化財　県…福岡県指定　町…町指定　考…考古資料　建…建造物
彫…彫刻　工…工芸　書…書跡　天…天然記念物　民…民俗資料　史…史跡

〔年中人事〕

梅の便りを聞く立春も早や過ぎ、日本列島は寒波の襲来を受け、各地に豪雪を降らせ寒気なお酷しい毎日である。

二月は従来暦の上では春めいた日があるが、気候的気温的には雪または冷雨の日が多く、寒波・寒風の荒狂う月である。

関西地方では三月十二日の奈良のお水取りがすまないことには、春がやってこないと言いつたえられている。

岩田帯　いわたおび

はらおびともいい、妊婦が五カ月目から腹部を巻く帯である。多くは晒木綿を用い、夫の六尺褌をしめると安産できるという地方もある。嫁の里方から贈られる風もあり、安産の神を祀る神社から借りてくることもある。産婆を招いてしめはじめをし、帯祝といって妊婦祝をする家もあるが、腹帯を用いなかったという地方もある。生理的必要よりも、呪術的な意味があったらしい。

産衣　うぶぎ

生れ児に産湯を使わせた直後に着せる着物を産衣という地方もあるが、この時は手を通す着物を着せないでおくるみにしておき、三日たってから初めて人並の袖のついた着物を着せる風もある。その場合はこれが産衣で、テトオシ・ミツメギモノなどという。

またはその後に行われる初宮詣りに着せる晴衣を産衣という地方もある。

七夜　しちや

新生児の誕生祝であって、子が生れるとその当日を初夜、次いで三夜・五夜・七夜・九夜と奇数の日に祝うのであり、また五十日（いか）、百日（ももか）の祝もある。

平安時代の上流社会では産養（うぶやしない）と称したが、後世この称はなくなり、またその祝儀もすたれ、七夜の祝だけが残って現在まで続いている。産養の祝儀はどの日も大体同様であって、親族・知人が集まり、新生児と産婦に対して祝賀品を贈り、一方産家では祝膳を設け、招待客を招いたので、産養には縁者が期日を定めてかわるがわるお祝にいった。

寛弘五年（一〇〇八）九月敦成親王が土御門第で誕生された折の産養の有様は、「紫式部日記」に詳記されている。「三日にならせ給ふ夜は、宮づかさ・大夫よりはじめておんうぶやしなひつかうまつる」「五日の夜は、殿の御うぶやしなひ」「七日の夜は、おほやけの御うぶやしなひ」とある。

後世も七夜の祝には客を集めて名付披露の祝をし、童名や実名を選定、命名し、現在も新生児の命名はお七夜までにするならわしとなっている。

産婆　さんば

出産を助ける婦人で、産婦の世話をし新生児に湯を浴びせなどする。もとは経験にとんだ婦人がこれにあたり特定の産婆はなかったが、だんだんなれた人が頼まれて歩くようになって、「トリアゲババ」・「ヒキアゲババ」と呼ばれた。看護もするが新生児の名づけや、七夜・宮詣・食初めの儀式の指導者でもあって、生れ児は産婆によって人間の仲間入りをしたようにに考えて、盆・正月の礼を厚くした。

今日では産婆を職業とするには国家の認定する資格が必要である。

堕胎　だたい

妊婦が病気の場合などに、母胎の安全をはかるため、医学的に早産するようにはかることはあるが、子供が多いからといって勝手に流産することは許されなかった。

江戸時代には農業も工業もすべて手労働であったので、人手が必要で子供が多く生れることをのぞんだが、それにもかかわらず貧しくて育てがたいことが少なくなかった。村で生れた者は村でくらす以外に方法のなかった時代には、資源に限りある村の生活が人口過剰になやまされることもあったので、ひそかに流産するものもあった。これを間引（まびき）といったのは産児調節という意味であった。

都会でも中条流などといって、産婆や産科医で頼まれて人工流産を助ける者があったが、方法が粗野で医学的でないために母胎を損することもあった。人情に反することなどで松平定信はこれを禁止している。明治以後、堕胎罪が構成された。戦後盛んになった家族計画と関係のある問題である。

乳母　うば

生母に代って幼児に乳を与えて育てる役目の婦人である。生母が病弱で乳が出ない場合、生母がなくなった時、或は貴族・豪族・多忙な商家の主婦などが、同じころに出産した婦人を自家に雇って、生れ児に乳を与えさせ、育児一切をまかせて、めのともいった。生れ児を乳母の家に預けて哺育して貰う場合は、里子に出すという。

中世以後貴族の子を京阪周辺の農家に預けて、健康に育てる風が行われたが、一般の家でも乳がなくて困る時には、里子に出して養育料を送った。乳を分けた乳母の子を「うばご」といい、哺育した子供との関係を乳兄弟といった。乳母は育ての親であるから子供との間の愛情も深く、めのとの場合も里親の場合も特に重くあつかわれた。

☆　☆

☆　☆

宗像大社歌会
俳句作品集（一六九）

田熊　安部　ゆき
晩学の夢は遥かに筆初め
冬ざれや軒の玉葱青く伸び

福間　広渡一寸毛
寒鮒も出て朝市の寒さかな
迎春のがめ煮がうまし母の味

東郷　有吉　春子
師の活けし松竹梅や初句会

土穴　八尋　恒夫
正月も新旧ありて餅を搗き

緑町　上野　義夫
立春の陽を背にかろひ杣下る
立春の陽や外に誘そうカメラ持

大井　吉田ますみ
風花や殉教哀史の島巡る

田熊　力丸　一郎
学ならず恥のみ積み来し喜寿の初春

小金井　宮島　佐紀
日向ぼこ朝づりの船かえり来ぬ

田島　有吉　唐水
神の池鯉沈みいて吹雪かな

宗像　岡田　無名
新雪を踏みしめ登る遍路道
石仏の赤き胴あて雪の道

西日本新聞社刊・滝口凡夫著

創造と可能への挑戦

ー出光佐三の事業理念ー

第九章　業界の一匹狼

蛟竜は永く池中のものならず

一、石油業は自由であるべきだ。戦前は自由だったし、戦後も価格については拘束しなかった。それなのに原油自由化後は、逆に生産を制限し、標準価格を決めている。これは、自由化どころか不自由化である。

一、石油会社のあり方は（1）消費者の購買の自由を尊重する（2）売れるだけ製造する、というのが基本である。これにそって、将来の製油、販売計画をたてるべきだと、かたく信じている。

一、消費者には、なぜ生産を制限するのか、なぜ製品価格が下がらないのか、不満が強い。私はこの夏から『石油政策を正道にかえすべきだ』と考えていたが、ある事情によって行動をとるのが数カ月おくれた。

一、出光は石油業法そのものに、まっこうから反対するものではない。業界が業法を悪用し業者の保護だけに終始しているのが納得できない。価格の安定は業者自身が行なうべきものであり、これをやらずに生産を制限し、消費者にめいわくをかけるやり方には賛成できない。

この中で『ある事情』というのは、三十八年八月に鉱山局長が交替し、四月から続けている出光興産独自の生産計画を中止するよう要請されたことを指している。新、旧局長は『それでは引き継ぎができない。下期から新しい基準をらえますから』と頼み、佐三も八、九月だけ生産ペースを落としたのである。

しかし、両局長の約束は実行されなかった。

この当時、出光興産はすでに日本石油に次ぐ業界第二位の大手だった。業界にとってはもっとも恐るべき〃オオカミ〃が、群れを離れ、単独行動をとり始めたのである。

驚いた福田一通産相は、すぐ佐三に会見を求めた。東京・日比谷の日活ホテルで会うと、のっけから文句をつけた。

『出光さん、あんたね、人といっしょに仕事をしているときに、自分だけ勝手なことを言っちゃいけませんよ』

よほど、出光に手を焼いていたのである。

佐三は、たちまち切り返した。

『大臣、あなたは何ですか。石油界のことを知ってそんなことを言うんですか』

福田はぐっと詰った。

佐三は、国際石油カルテルの政策、日本の石油業界の現状を詳細に説明し、最後に言った。

『戦後、他の石油会社はみな国際カルテルの傘下に入った。出光だけがカルテルに膝を屈することなく、国家のため消費者のため奮闘している出光がなかったら、日本の石油界はひどい目にあいますよ』

福田が帰ろうとすると、佐三は言葉を続ける。福田はとうとう、三回ほどオーバーを着たり脱いだりした。

業界、石油審議会などの動きもあわただしかった。

石油審議会の小委員会は、石油業法によって勧告権を通産相に発動させようとした。

伝え聞いた佐三は、ビクともしなかった。『勧告するならどうぞ。出光がなにをやっているか、石油業法違反かどうか、国会で国民の前で黒白を明らかにしましょう』

もともと出光興産は、石油連盟による生産調整自体が業法違反、との立場をとっていた。

出光は政府、業界を相手に、がっぷり四つに組んだまま三十九年の正月を迎えた。

強味はなんといっても、消費者に直結した販売力だった。三十八年十二月の実績をみてみると、前年同月にくらべ国内各社の全石油製品販売量は一三・六パーセントふえている。この中で、出光のシェア（市場占拠率）は一四・八パーセントから一六・二パーセントに高まった。一位の日本石油一六・六パーセントに、あとひと息のところまで迫っている。

もちろん、社内に動揺はなかった。佐三を中心に『大家族主義』『独立自治』の社風が脈々と生きていた。

佐三は社内報『オイルダイゼスト』新年号に『昇天の勢い』と題する年頭の辞を書いた。

『ことしは辰の年である。〃蛟竜（こうりゅう、竜の子のこと）永く池中のものならず〃という言葉がある。本年はまさしく、この言葉が適中する年ではなかろうか。

昨年は卯の年であった。私が年頭の辞で述べたように、兎の出光は手カセ足カセをはめられて、丘の上に居眠りすることを余儀なくされ、一年は無意味のうちに過ぎ去った。

しかしながらこの兎は、活眼を開いておったのである。年末に近づくにしたがって、兎は走りだした。そして辰の年になったが、終戦後二十年の永きにわたって池中にひそんでいた蛟竜が、雲雨を得て昇天の勢いを示す年となるであろう』

創業いらい五十三年、佐三は七十八歳になろうとしていた。

年頭の辞には、久しく苦難に耐え、人を養い武器を蓄えた猛将が、いよいよ中原に馬を進めようとする気概に満ちている。そこには、驚くほど若々しいエネルギーがある。

奔馬のような出光の動きに、政府、業界の方が軟化し始めた。

三十九年一月の半ばごろ、植村石油審議会会長（経団連副会長）による『植村あっせん案』が固まった。

その骨子は（1）三十八年十月ー十二月は連盟案どおりとする（2）三十九年一月ー九月は新しい配分基準を採用する、という妥協案である。千葉製油所の設備能力は、一月から基準に含められていた。

一月二十五日、通産省大臣室で福田通産相、植村石油審議会会長、佐三の三者会談が開かれた、佐三も植村案に同意、問題はいちおう解決することになった。

通産省は、全文つぎの『三者会談メモ』を発表した。

一、植村会長から指示された生産調整案にしたがって、三十九年一月ー九月の原油処理を行なうこと

一、石油業法の供給計画の作成などに当たっては、消費者の立場を考えて、ゆとりのあるものとすること

一、現在の石油精製業の設備の現況などからみて、当面生産調整は廃止することはできないが、過剰設備能力をなくすなど事態の改善をはかりつつ、できるだけ早くなくすようにすること

一、政府の指導のもとで行なわれる生産調整については、こんごこれを十分遵守すること

福田通産相も『出光問題にかんする通産大臣談話』を発表、さらに佐三は出光興産社長名でつぎの『声明書』を発表した。

『できるだけ早い機会に生産調整を廃止し、石油市場を自由化して消費者の立場も尊重する、との大臣談話が出されて、政府にも出光の主張がわかってもらえてこれが認められた。

政府声明に深甚の敬意を表するものである。

このように政府の態度に信頼と敬意を寄せながら、今回植村審議会会長から提案された一ー九月生産調整案を受け入れた。こんごとも、石油業法の運用に協力することにした』

三者会談で佐三が妥協したのは『十月から生産調整を撤廃する』という暗黙の約束があったからである。『できるだけ早く』という表現は、正確には『十月から』の意味だった。

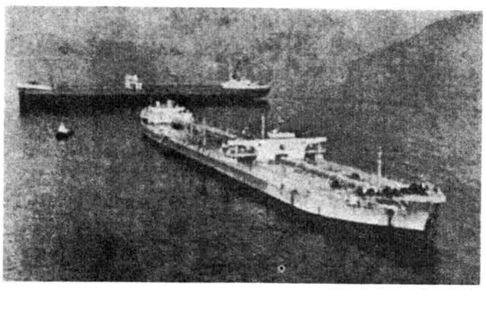
ところが、この約束もホゴに終わった。植村あっせん案の配分基準が、引き続き踏襲されることになった。

石油業法の国会審議のとき鉱山局長は『政府の供給計画はひとつの見通しであって、これに基づいた生産割り当てをする考えはない』と答弁している。三十八年八月の新、旧局長交替のときには『下期から考え直しますから』ということだった。三者会談では『十月からの撤廃』を約束した。

これらは、すべて守られなかった。

佐三はいう。

『人間はウソつきだ。オオカミの方が正しい、ということじゃ』



偉容を誇る出光丸（手前）と日章丸

こうした中で四十年十一月、海員組合のストが始まった。原油が輸入できない。業界の貯油は、月間消費量の半分ぐらいしかない。重大なエネルギー危機である。

『三カ月ないし六カ月分の貯油が必要』というのが、佐三のかねてからの主張である。出光はこのころ、約四十日分の貯油を持っていた。

佐三は政府に提案した。『出光には貯油がある。製油所の能力も余っている。供給の安定をはかるため、思うぞんぶん製油したい。また、ストが長びけばヤミ価格も出るだろう。価格の安定にも努めたい』

筋の通った話である。政府には反対する理由がない。しかし、生産調整を続けているときだから、おおっぴらには賛成できない。『暗黙の賛成』である。

徳山、千葉の両製油所は、十一月二十六日からフル操業に入った。

翌年一月、ストが解決したときには、わが国の貯油はほとんど底をついていた。

その直後の石油審議会で、出光の評価は大いにあがった。石油業法による統制、その運用の不備が鋭く追及されることになった。

石油市況も回復に向かい、二月には標準価格が撤廃された。

これから半年ほどあとの四十一年八月二十九日、三木武夫通産相は抜き打ち記者会見を行い『十月一日から石油の生産調整を撤廃する』と発表した。

続いて九月二日藤岡石油連盟会長と佐三を通産省に招き、生産調整の撤廃を通告すると同時に、出光興産の連盟復帰を要望した。

石油業法の三本の柱のうち、設備の許可制だけは残っているが、標準価格と生産調整が廃止されれば、連盟脱退の理由は大半が消滅する。佐三は復帰を了承した。

出光興産が石油連盟に復帰した十月一日、佐三は社長を弟計助に譲り、会長に就任した。同時に、石田正実氏が専務に昇格した。

明治四十四年六月二十日、門司で出光商会を創業していらい五十五年間、佐三は出光をリードし続けてきた。四十一年度の売り上げ高は、二千百六十一億円に達していた。事業規模は、かつて出光商会が地方の一特約店にしかすぎなかったころの親会社日本石油と、ほとんど肩を並べるほどになった。神戸高商を出たばかりの二十五歳の青年が、いくたの風雪に耐え抜いて八十歳の寿齢を迎えていた。

常識的には『功成り名遂げて』引退するところである。

しかし佐三には引退はない。

会長になった直後の十月二十日、東京・芝の迎賓館で開かれた創業五十五周年の記念祝賀会でのあいさつで、集まった従業員に向かってユーモアたっぷりに、こう述べている。

『私は十月一日の朝、社長を罷免（ひめん）されて、これでゆっくり遊ぼうとしたところが重役から〃そうはいかん、お前には店主という仕事があるではないか。店主というのは五十五年も前から、朝から晩まで、働くようになっているから働け〃というようなことを言われて、ちょっとがっかりしているようなわけです。

これからは、社長から昔の店主に若返りまして、家族のみなさんといっしょにいろいろのことを考えたり、仕事をしたりすることになりますから、どうかみなさん、この出戻り店主をいじめないように可愛がってください』

好々爺が、成長した孫たちに語りかける口ぶりである。

出光はふたつの定款がある。すでに何回かふれたように、石油業という『法律上の定款』と、もうひとつは『人間の真に働く力を顕現し、国家社会に示唆を与える』という『精神的定款』である。

この第二の定款——これこそが、出光の根本的理念、目標の表現——が消滅しないかぎり、佐三の仕事も終わらない。おそらくは、永遠に続く課題なのである。

佐三自身『会長』という名称は、どうも好きになれなかったらしい。五十五年間、従業員や販売店主たちから『店主』と呼ばれ続けている。『社長』という名称は仕方がないにしても『会長』はいかにもよそよそしく、親しみがない。

出光興産では翌四十二年八月、臨時株主総会で定款第二章『店主』を新設した。

『当会社は創始者出光佐三を店主と称する』

動くパイプライン

四十一年九月五日の早朝、横浜市磯子の石川島播磨重工業第二工場建造ドックの船台から、巨大な一隻の船がすべり降り、ゆったりと海に浮かんだ。

広い造船所の構内でこれを見守ったのは、黄色いヘルメットに作業服の工員たちと少数の出光の関係者だけだった。神官の祝詞が終わり、船が動きだしたとき、船尾からぱらぱらと散った紙吹雪が、たったひとつ、この進水式にそえられた色どりだった。

しかしこれが、世界で初めて二十万トンを超える船が、海に浮かんだ瞬間だった。見あげる工員たちの目はいちようにうるんでいた。

それから約二カ月後の十二月七日、すっかり艤装を終わった船は、赤とクリーム色の美しい船体を、お隣りの第三岸壁に横たえていた。台風の接近が伝えられていたが、ふしぎと空は晴れ、風もなかった。

岸壁にはテント、まん幕が張られ、ぞくぞくと詰めかける乗用車から来賓や報道関係者たちが降りた。横浜市の消防局の音楽隊が到着し、船橋には巨大なクス玉がつるされ、花火も準備された。

進水式とはうって変った、はなやかな竣工式である。

午前十時、船橋の操舵室で宗像神社の鎮座祭と命名式が行なわれた。佐三、田口連三石川島播磨重工業社長ら両社の首脳がいならぶなかを、計助社長が神前に進み、うやうやしく奉告した。

『本船を出光丸と命名する』

船橋のマストに掲げられた石川島播磨重工業の社旗がおろされ、代って出光興産の社旗があがった。シャンパンのびんが割れ、クス玉から紙吹雪とテープが舞い散った。

出光丸は正式に出光に引き渡され、石油の安定供給に絶大な威力を発揮することになった。

十二日にはイカリをあげ、中東、クウェートに向かって処女航海の途についた。

わが国は自由世界で米国に次ぐ石油の大消費国である。精製する原油のほぼ全量を輸入しており、しかもその約八五パーセントが中東諸国からである。

石油業法で標準価格が決められたとき、原油輸入価格の約二五パーセントは運賃として算定されていた。それほど、外航運賃の比重は高い。消費者に安い石油を供給するためには、これの引き下げが重要な課題となる。

だれでも思いつく解決策は、外航タンカーの大型化である。いちどに大量に運べば、トン当たり運賃コストは当然、低下する。

しかもわが国は、中東原油を運ぶのに欧州諸国や米国のように、スエズ運河やパナマ運河を通る必要はない。はるか、アフリカや南米大陸の南端をう回する必要もない。東南アジアのマラッカ、ロンボクといった海峡を、ぎりぎり通過できる限度まで大型化することができる。

となれば、残る問題は造船技術だけだが、これもわが国の場合世界に冠たる造船国である。

大型タンカーをぞくぞくと建造でき、安い石油をふんだんに使えるという点では、わが国は全世界の工業国の中で、もっとも恵まれている。

戦後のタンカー大型化は、まず米国の業者によって口火が切られ、ギリシャ船主がこれに加わって競争は白熱化した。三十年には五万トン級のスーパー・タンカーが建造され、続いて七、八万トン級のマンモス・タンカーの時代に入った。

現在は、五十万トンから七十万トン級の時代に入っている。

この外航タンカー大型化をリードし、世界で初めて十万トン、二十万トンの大台を破ったのが出光興産である。

徳山製油所建設の突貫工事が進んでいた三十一年七月、エジプトのナセル大統領がスエズ運河の国有化を宣言、中東にアラブ・ナショナリズムの火の手があがった。十一月には、運河が閉鎖された。

西欧諸国は中東原油を運ぶのに、アフリカ南端の希望峰を回らなければならなくなった。スエズ運河を通過できる程度のスーパー・タンカーをう回させていたのでは、運賃コストが大幅に高くなる。米国政府は『十万トン以上の船を造るならば援助する』と発表した。

徳山製油所が完成すれば、いずれにしろ出光にはタンカーが必要だ。佐三はスエズ運河の国有化宣言後、ただちに重役会を開いてマンモス・タンカーの建造用船を決めた。

（つづく）